

肥後の「おてもやん」と津軽の「弥三郎節」
～民謡を訪ねて～

子どもの頃に「民謡を訪ねて」という番組がラジオから流れていた。聴くともなく聴いている内に耳に残る唄がいくつかあり、民謡に興味を感じるようになった。この番組は今でも続いており、時々聴くことがある。20才を過ぎた頃だったのだろうか、「日本の民謡」という小さな本を手に入れて、旅や登山に出掛ける時に持ち歩いた。電車の中で退屈した時やテントの中で暇な時にパラパラとめくって見るのにちょうど良かった。民謡にはその土地の生活様式や慣習などがくつきりと表れているものが多いので、歌詞を読んだだけでもその地を旅したのと変わらないほどの収穫が得られる。文字通り民謡は「民(たみ)の謡(うた)」なのだ。様々な民謡を聴いて見て読んでみた中で、強く印象に残った唄がこの二曲だった。

< 1 > おてもやん

おてもやん あんたこの頃嫁入りしたではないかいな
嫁入りしたこたあしたばってん
ごていどんが ぐじゃっぺだるけん まあだ盃やあせんだった
村役鳶役肝煎りどん あん人達のおらすけんで 後はどうなときやあなろたい
川端町つつあんきやあめぐろい 春日ぼうぶらどんたちや尻ひっぴやあて 花盛り花盛り
ピーチクパーチク雲雀の子 玄白なすびのいがいがどん

唄で聴いていると「面白い唄」として通り過ぎてしまうが、文字を丹念に追っていくと疑問点や不思議に思う箇所が見つかり、驚きも沢山ある。

まずは、むき出しの熊本弁で度肝を抜かれるのだが・・・・・・、そして二番に入るとこんな展開になる。

ひとつ山越え もひとつ山越えあの山越えて
私やあんたに惚れとるばい 惚れとるばってん言われんたい
追々彼岸も近まれば 若もん衆も寄らすけん
熊んどんのよじよもん詣りに ゆるゆる話をきやあしゅうたい
男ぶりには惚れんばな 煙草入れの銀金具が それがそもそも因縁たい
アカチャカベッチャカ チャカチャカチャ

転勤により四年ほど九州一円で仕事をする機会があったので、九州の各地の言葉が少しばかり理解できるようになった。好機到来と再びこの唄を読んで見てさらに面白さが増したが、すべてを理解するには程遠かった。そしてさらに30年弱、あらためて読み直してみても少しずつではあるが明らかになってきた。しかし参照する資料は多岐にわたり、解釈に諸説ある部分もあり模範的な訳文にはならなかったようだが・・・・。

おてもさん あなたお嫁に行ったんだって？

嫁入りしたことはしたんだけどさ

亭主が天然痘にかかって顔がアバタになっちゃったので まだ三々九度の盃はかわしてないのよ
村役人、鳶の役人や仲人さん達がいるから、あとはどうにかなるでしょう

川端町(繁華街に近い)に行ってみましょ

春日(かぼちやの産地)のかぼちや野郎たちが裾を引いたりして、もててしょうがないのよ
でもピーチクパーチク雲雀のように煩い奴や玄白茄子のような男には興味はないわよ

川端町は、熊本城の南東を流れる白川がその流れを西南西から南へと大きく変えるところにあり、文字通り白川の右岸の川端に位置する。近くに祇園橋という橋があるぐらいだから、その昔は華やかなところだったに違いない。春日町はそのやや下流、熊本駅を挟んで反対側(西側)にある町で、花岡山(はなおかやま 132.2

m) と万日山（まんにちやま 138m）を背にした温かそうな所である。



30年前「原爆なすびのいがいがどん」と聞こえてしまったので、この部分だけはどうしても理解できなかった。この唄が作られた時代には「原爆」はまだ世に登場していない筈なのに何故だろうと引っ掛かっていた。今回調べ直してみてもその疑問は解消できた。正しくは「玄白茄子（げんぱくなすび）」で、杉田玄白が広めた茄子のことであるとわかり、スッキリした。さらに、玄白茄子とは不細工な顔を言うらしいこともわかった。続いて二番は、

いくつも山を越えて（艱難辛苦を乗り越えての意？）行かないとあんたに会うことができない
私はあんたに惚れているの 惚れているからこそそんなこと言えないのよ
お彼岸も近くなってきたので 若者たちも集まってくるでしょ
「熊本の夜の聴聞（くまんどんのよじよもん）」の集まりで ゆっくり話でもしましょう
私は外見だけの男ぶりには惚れないの 煙草入れの銀金具を見てその人が気に入ることもあるの
あら、余計なことを喋ってしまったわ、恥ずかしい・・・

二番の歌詞の中では「くまんどんのよじよもんまいり」が30年前には理解できなかったが、今回の再学習でわかってきた。「くまんどん」は熊本または球磨地方を指す言葉であったり、その地方の出の者を意味する言葉としても使われるらしい。「よじよもんまいり」とは「夜の聴聞詣り」で、お寺さんに夜集まって僧侶のありがたい話を聴きながら集まった人々が交流するもので、地域の交流拠点になりまた男女の交流の拠点にもなっていたらしい。

そして最後に残る疑問の「あかちゃかべっちゃかちやかちやかちや」。九州の他の地方にも同意語の「あかちよかべ」が存在するので、「あかんべえ」を意味する「あかちやか」を元にした言葉遊びではないかと思う。この唄は、永田イネという三味線のお師匠さんが作詞・作曲したもので、実在する富永チモと言う人の実話をモデルにして作られた唄らしい。原作は二番までしかないが、今では後年付け加えられた三番まで唄う人もいるらしい。しかし、原作の範囲でもどこまでが実話部分なのか疑問は尽きないのだが・・・。

■参考情報：熊本弁の解説（熊本県人会） <http://kumamoto-kenjinkai.com/regional/index.php>

< 2 > 弥三郎節

「おてもやん」は歌詞の持つ滑稽さに驚いたのだが、歌詞の生々しさに驚いたのが津軽の「弥三郎節」。津軽三味線に乗って語りのように唄われる数え唄、津軽弁ではあるが歌詞は聞き取りやすく理解しやすいので初めて耳にした時には驚いた。地名や個人名が唄の中に出て来て、特定の家の特定の人が明らかになっている露骨な歌詞が耳から離れなかった。

ひとつあえー 木造新田の下相野 村の外れこの弥三郎え アリヤ 弥三郎え
ふたつあえー 二人三人と人頼んで 大開の万九郎から 嫁貰(もろ)た アリヤ 弥三郎え
みつあえー 三つ物そろえて貰た嫁 貰て見たども気にあわね アリヤ 弥三郎え
よっつあえー 夜草朝草かかねども 遅く戻ればしかられる アリヤ 弥三郎え
いつつあえー いびられはじかれにらめられ 日に三度の口つもる アリヤ 弥三郎え
むっつあえー 無理な親衆に使われて 十の指こから血こ流す アリヤ 弥三郎え
ななつあえー なんぼ稼いでも働いても つける油こもつけさせねえ アリヤ 弥三郎え
やっつあえー 弥三郎家こぼり日こ照らぬ 藻川の林こさも日こ照らぬ アリヤ 弥三郎え
ここのつあえー ここの親たちやみな鬼だ ここさ来る嫁みなばかだ アリヤ 弥三郎え
とうわえー 隣知らずのぼた餅こ 嫁さ食(か)せねで皆隠す アリヤ 弥三郎え

あまり解説がいらぬそのものずばりの数え唄だが、これが 15 番まで続く。15 番でいよいよクライマックスに到達する。

じゅうごあえー 縁のないもの是非もない 泣きの涙で暇もろた アリヤ 弥三郎え

「木造新田の下相野」は青森県西津軽郡木造町の字で、五能線の中田駅からやや木造方面(東側)に寄った所にあり、現在の地名では「つがる市森田町下相野」。五所川原と鯉ヶ沢のほぼ中間に位置する所で、岩木山の北側に位置して冬には大陸からの季節風をまともに受ける場所である。地図を見ただけでも厳しい暮らしが強いられる場所だと想像がつく。弥三郎の家(津軽弁では「弥三郎え」と言う)はここにある。

大開は弘前駅から南西へ(秋田県境に向かって)4Km 程行った山麓にあり、岩木山の裾野を挟んで木造までは約 30Km ある。二人三人と人を介して縁を得た女性は大開から下相野の弥三郎の家まで嫁に来た。岩木山の南東の大開に比べると下相野の冬はかなり厳しかったのではないかと思う。

田舎には「箆笥・長持ち・布団」を揃えて嫁入りする習慣から、長持ち唄など婚礼にまつわる唄が存在した。この三点を婚礼の三点セット(昔風に言えば三つ物)と言った。馬車に積んだり馬の背に分けたりして列をなして歩く写真を見たことがある。

ところが・・・、弥三郎の家では三つ物そろえて貰った嫁がどうも好きになれない。

叱れる内はまだ軽いもので、いびられ、弾かれ、睨められた挙句、日に三度の飯も食わしてもらえなくなる。おまけに、十本の指から血が出るほどに(ひび・あかぎれだろうか)こき使われ、手に塗る油さえ付けさせてはもらえない。

ここまでの歌詞では陰険な虐めの実態を唄い、ここから俄かに弥三郎家のこきおろしに移る。

「弥三郎の家の親たちは皆鬼だ!」と糾弾し、「こんな家に来る嫁は皆馬鹿だ!」とまで言い放つ。

そして 13 番まで行くと「どこから嫁を貰っても、ここの婆さまの気には召さない」となり、14 番で「餅つきする時には湿りを打たないでも涙で餅ができた」となり、15 番で遂に離縁となる。

8 番に登場する藻川は十三湖に向かって北に向かって流れる岩木川の東岸を走る川で、下相野の北側に藻川という字もある。「藻川の林にも日は照らない」と唄う部分の意味が理解できないが、おそらくこの地に住む人にならわかる「藻川の林」の存在が関係するのかもしれない。

歌詞の中心にある「弥三郎え」は実在した個人の家らしく、「誰が嫁に行っても戻されてしまう家」と悪評が立ち、やがてこの家はこの地を去ることになったという後日譚もあるらしい。

高橋竹山の演奏を聴いていると太棹の重厚な響きと津軽三味線独特のテンポに引き込まれてしばし聴き入ってしまう。しかし、この曲に唄が加わるとまるで異なる空気に包まれてしまい、聴いた後で黙ってはいられなくなる「物凄い民謡」である。

■参考情報：弥三郎節 歌詞 <http://seigenkai.com/yasaburobusi.htm>

